

「西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学総合人間学部2年 塩田温子

① 学習成果

もともとこのプログラムに参加したのは中国語を話す自信がほしかったからである。行く前は本当に中国語を学ぶという意思を強く持っていて、それまでに北京大学生との交流を持ったり、パレスチナでヴォランティアをした経験があるので国際交流に不安を感じることも気負うこともなくそこには自信を持っていた。だからやっぱり行く前は中国語をいかに話していくかということを考えていた。だからそのための準備として用意された中国語のクラスはできる限り参加した。そして、留学中。私は国際交流のノウハウという意味では問題がなかったので、中国人と過ごす時間はできるだけ中国語をしゃべる時間にしようと心掛けた。向うの中国人学生はみな日本語がとてもしゃべるともすればそれに甘えてしまいそうになったが、なんどもここにきているのは中国語を勉強するためだと思い、常に「中国語でなんて言うの?」「この文であっているか」など質問をし、ノートにとり、一日が終わると学んだ、言い回しを使い日記を書き、いろいろな人にしゃべるたびに使った。とにかく、辞書ではできない中国語の実践を毎日行った。そのおかげで、発音がだいぶ改善され、自分の狙い通りの結果になった。留学を終えて、思うのは言語を身に着けるのはやはりオープンマインドで現地に飛び込むことである。私は中国語以外にもアラビア語やロシア語を学んでいるので、これからもその言語がしゃべられている地域に入り、コミュニケーションをとることで、言語とその文化をじかに学び、日本にいるときに一枚の布を通して学んでいるようなもどかしさを解消していきたいと思った。このプログラムを通して中国への興味も今まで以上に持つようになった。今までは、上海、香港、杭州、北京など経済発展と遂げている沿岸部ばかりを訪れていたが、今回内陸を初めて訪ね、中国の広大さ、それゆえの地方性の強さを肌で感じた。イスラム教の人々や、ラマ出身のチベット族の友達もでき、今度はそういった少数民族の地域を巡る旅というものもなかなかよいのではと思っている。もっといろいろな視点から中国を知りたいと思った旅であった。

② 海外での経験

実は中国は4回目、この夏訪れた国は4か国である。だから、パレスチナなどとは違って、やはり中国は日本と似ていると思う点が多々あり、とても新鮮ということはあまりなかった。しかし、前回中国を訪れたのは7年前であるが、その7年前からの変化というのを大きく感じた。やはり七年間の中でさらにグローバル化が進み、海外との交流が多くなったせいか、日本人と分かっただけでじろじろ見られることも少なくなったし、何よりも海外から訪れる人に対して親切になったように思った。

③ プログラム内容

ホテルが豪華すぎるので、もう少し格下でもよい。高すぎる。日本語がしゃべれるヴォランティアばかりで、人によっては中国語をあまり話さなかった人もいた。すべてがあまりにも用意されすぎていて、逆にもっと逆境にもまれてもいいのと思った。また、授業が少なすぎて、もっと中国語を学びたかったし、もっと文化を学びたかった。予定がかなりスカスカで、自由行動も多すぎてそこまで行くところはないので、もう少し交流の場や、授業があってもよかったと思う。また時期とボランティアについてだが、ボランティアの学生が四回生ということもあって、就活に忙しくあまり関係をもてなかった。時期をかえるかボランティアの学年の幅を増やすべきだ。そして、ボランティアは無償なので、やはりめんどくさいという思いもかいま見えることがあった。いくら相互のためになるかもしれない交流でも、向こうで暮らしている学生がただ使いされているようで、それが原因で私たちの交流もうまくいかないときもあった。

④ 進路への影響

これからは海外について日本で得られる情報以上のものを得ていきたいと思った。やはり日本で勉強するのは実際に行くのでは全然違う。そして中国と日本の間で民間レベルで生じている誤解を解くためになにかできるのではと思った。次に機会があったら中国で中国語をもっともっと勉強したいと思う。